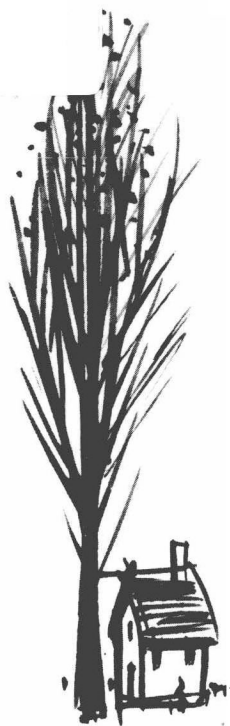


加藤幸子
わたしの動物家族



朝日新聞社

藤幸子
たしの動物家族



朝日新聞社

わたしの動物家族

一九八八年十月二十日

第一刷発行

著者 加藤幸子

発行者 八尋舜右

印刷所 共同印刷

製本所 青柳製本

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五十三一二

電話 〇三―五四五―〇一三一(代表)

編集・図書編集室 販売・出版販売部

振替 東京〇―一七三〇

定価 一一〇〇円

目次

少女動物一座

北京の〈鉄〉 7

壁を飛んだオンドリ 13

ぐずチロ捕物帳 19

小川未明のカメ 25

アタック家鴨 32

私の刺客名簿 41

蜂の母親？ 47

幻の昆虫学者 52

犬たちの戦後（その一）——ポチの生涯 59

犬たちの戦後（その二）——都会の牧羊犬 65

犬たちの戦後（その三）——窓辺の詩人 71

ウサギは兎小屋へ 83

大学農場で……

90

わたしの動物家族

町にいたリス

99

何十万匹十一羽のイノチ

107

三匹の猫

113

老犬の家出

125

蜜柑をめぐる虫物語

133

二十日鼠と人間と

138

海へ行ったミケーネ

147

アフリカで会った動物たち

動物孤児院のスカラベ

175

ほんとにアフリカ一人旅

179

犬のための“あとがき”

220

A D 装幀
挿画
熊谷 博人
川村 みづえ

少女動物一座



北京の〈鉄〉

一九四五年敗戦の年、私の一家は北京市内の日本人官舎で暮らしていた。私は国民学校の三年生だった。戦場に近い外地という特殊な条件もあったのだろうが、その学校はとも規律に厳しくて、朝礼の点呼で名札やちり紙をわすれてくると教師の掌が遠慮なく頬に飛んでくるのだった。将来は女の子は全員「看護婦さん」、男の子は「兵隊さん」というのが、学校で定めた目標であった。

一方、私はいつもぼおっとしている子で、号令をかけられると必ずほかの子どもより一足も二足も遅れた。当時の私の最大の喜びは、学校を休むことだった。目が覚めると、体がどこことなくだるくて温かい。私は寢床の中で母親を呼ぶ。

「熱がでたよ」

「あら、また？」

何て体の弱い子だろうと、母親はがっかりするが、体温計は三八度を示しているのだから仕方がない。迎えにきた同じ官舎のブンちゃんに「病氣なの。先生にそう言ってね」と頼むほかはない。

さて学校を休むことに決まると、ふしぎなことに私の体温は少しずつ下降するのだった。私は寢床の中に童話をたくさん持ちこんで、主人公とともに空想の旅に出発するのである。敗戦の日に、国民学校がつぶれてしまったとき、私を感じたのは無限の解放感であった。

エアデルテリアの〈鉄〉が、私の家に来たのはその直後のどさくさしたところだった。体じゅうミニドーナツみたいな巻き毛でおおわれた大柄の犬だった。正方形に近い体、角材をちよん切ったような顔、黄色地に黒い毛布をかぶせたような背中。鉄を一目見た瞬間、私は愛読書のギリシャ神話の中のトロイヤの木馬を思いださずにはいられなかった。

彼を連れてきたのは、北京の日本人社会での情報通である炭屋のカトーさんだった。

「鉄、お笑い」とカトーさんが言った。

すると犬は私の腕より太い前足を差しだして「笑った」。ほんとうに唇をめくりあげて、つららのような齒列をむきだして笑ったのだ。カトーさんは、私たち一家が動物好きであることにしつかり目をつけて、自分がもてあましていたこの大飯食らいを会わせにきたのである。次にカトーさんは、鉄の不幸な運命について物語りはじめた。

「この犬は、うちのお得意さんだった芸者の花さんからの預かり物でしてね」と炭屋さんは言った。「先日、お仲間の芸者衆といっしょに引き揚げる予定だったのに、直前に急性腹膜炎で入院してしまいました。そして気の毒にそのまま……。遺品の着物や草履ぞうりが洋車ヤンチャ（人力車）にのって帰ってきたときのこいつの様子ったら……」

カトーさんはしんみりとした。「くんくん鼻を鳴らして、行李のそばを離れようとしな
いんですよ」

炭屋のカトーさんの作戦は図に当たり、鉄はその日からわが家の一員になった。

家族の中でだれよりも鉄を歓迎したのは、たぶん私であった。国民学校が廃止されてからの私には、自由に使える時間がたつぷりあった。官舎に住む友だちは続々と帰国してしまい、広い院子ユテン（中国風の庭）に残っている子どもは私一人であった。その理由は、農業昆虫の専門家であった父が、中国の政府機関に留用されていたからである。院子の探検にも、読書にもさすがに私は飽き飽きしていた。私の遊び相手は鉄だけだった。いちばん奥の院子にあるカイドウの大木の下にござを敷き、鉄を大男のお客さまにしてままごとをした。ごちそうはお皿に山盛りのカイドウの花びらである。「おあがり」と言うと、大男はすごい鼻息でごちそうを吹きとばした。「だめっ！」と叱ると、毛むくじやらの前足で握手を求めた。

しかし私は今でも信じているが、鉄はけっして新しい主人の気紛れに辛抱してつき合っていたのではない。彼もまた楽しんでいたのである。静かな春の院子で、自分の体重の半分ぐらいのやせっぽちの女の子とままごとをするのが気に入っていたのだ。鉄の目はぶどうの粒みたいでピカピカしていた。私はその目に怒りや恨みの色をみたことがなかった。元飼い主の花さんは、よほど鉄をかわいがって育てたものとみえる。自分の犬のために、彼女はとびきり上等の食事を作ってやっていたにちがいない。家に来た当座の鉄の毛皮はつやつやで、お腹には脂肪がゆさゆさ揺れていた。鉄が戦中戦後の日本人の家庭にふさわしく、何となくみすばらしげに変身したのは、わが家で数カ月を過ごしてのちであった。

敗戦後一年もたつと、孟母とは言いがたい私の母も、かなり娘の教育のことが心配になったらしい。帰国については、まったく見通しがたたない状況であった。小学校三年中退のままでずるずると暮らしていてもよいものだろうか。母はどこからか四年生の教科書を手に入れてきて、少なくとも午前中は教師になる決心をした。ところが世の中で教師ほどむずかしい職業はない。また母親の生徒になった子どもほど、みじめな存在はほかにない。新米の教師は、授業の都度かんしゃくを起こし、生徒のほうはそなたびにわあわあと泣きわめいた。ところが母親は、思わぬ伏兵に出あうことになった。私が泣きはじめると、それまでおとなしく床に座っていた鉄が立ちあがり、大声でほえたてながら二人のまわりを

跳びはねるのである。家鳴り震動する騒ぎに、ますます怒りを発した母親は娘と犬を物置に閉じこめた。すると鉄はさっそく、塩辛い涙で汚れた私の顔をなめはじめるのだった。お湯でしぼった古雑巾みたいな温かく柔らかい舌触りを、私は今でもありありと思い出すことができる。鉄は私の心を周囲のだれよりもよく理解したのだ。

戦後の中国では、日本人向けの配給はストップし、私たちにとっては最悪の食糧事情であった。日々の常食は高粱コウリヤンか粟のお粥かゆ、とうもろこし粉を固めて蒸したウオトウというパンで、これらは当時の中国の労働者の食物であった。かつてはかなりのぜいたくに慣れていた鉄の食物も、もちろん私たちに準じていた。鉄にはこれがもつともこたえたのである。最初はこれが食物？ と疑い深そうな表情で口にしながら、やがて文字どおり背に腹は代えられず、少しずつ粗食も受けつけるようになった。

ある日、食堂から家じゅうに響きわたるほどの叫び声が聞こえた。

「こらっ！ 何するのよ！」

駆けつけてみると、母親が鉄を部屋の片隅に追いつめてパシパシぶっていた。彼女の顔は真っ赤に染まっていた。鉄は恐縮しきった面持ちで歯ぐきを出して「にやにや」していた。よく見ると、笑う犬の口のまわりにべっとりとラードがついていた。テーブルの上に引っくり返った中華鍋があつて、いため野菜がこぼれていた。私は「やめてよ、やめてよ」

といって、母親にすがりついた。同時に彼女も床にへたりこんで、私の顔を見て泣き笑した。鉄のほうはいいかわらず、身を縮めて必死で「お笑い」の芸当を続けていた。

まもなく鉄も、私に遜色なくやせてきた。粟を食べると、黄色いブツブツのままのフンをした。軟らかい物ばかり食べていた胃袋は、穀物を消化しきれないようであった。私はお八つのカンパンを分け与えたが、それは鉄の洞穴みたいな口中を滑り落ちてどこかに消えてしまうほど少量であった。私たちがやつと中国人社会になじみ始め、生活が安定を取りもどしたころになっても、鉄の栄養失調は回復しなかった。

ある冬の朝、私が起きてみると、家の中がともしんとしているのに気づいた。鉄は居間の床の上にいつもの通り寝そべっていた。しかし、彼はもうこれ以上、食物のことで苦勞する必要がなかったのである。

「うちの鉄がしにました。かわいそうな鉄よいまどこにいる」

私が生まれて初めて作詞作曲したのは、この数日後であった。

壁を飛んだオンドリ

敗戦後も引きつづいて北京に残留した私たちのもとには、先に日本に帰る人々から様々な品物が届けられた。皆、愛着があつて捨てるに忍びないものばかりである。子どもの私にも幾つかの贈り物があつた。

金髪の人形（ボーリー）もその一つであつた。彼女は英国製で、えんじ色のラシャのドレスを着ていた。表情はもの静かで、初対面の私がしばらくは遠慮を感じるほど冷たい青い目をしていた。本来なら、ガラス箱の内側にじつと立たせておくべき人形だったので、う。ラシャのドレスが虫食いだらけだったので、母は私の服の端切れでワンピースを作ってくれた。着替えるために服を脱がせたとき、私ははっとした。人形の体に黒褐色に焦げた跡がポツポツ散らばっていたからだ。私は見てはならないものを見たような気がして、あわてて新しい服を着せた。いったいどのような過去をこの人形がたどってきたのか、そ

れは幼い私の空想を超えていた。おそろいの服を着た私とポーリーは、それからは常にいっしょだった。二年後の引き揚げ船の上でも、私はしっかりと彼女を抱いていた。

人形に人形の生があるように、今まで私の飼った動物たちも一つとして同じ生き方をしたものはなかった。どんな動物も、それぞれの個性にふさわしい生を貰った。

ポーリーが私の所有になったところ、やはり一羽のオンドリがわが家に到着した。これは父が勤めていた研究所の中国人の同僚から贈られたのである。彼は、私たち家族がやせて肌の色つやが悪いのを気の毒に考えていたのだろう。オンドリが私たちの胃袋に収まることを期待していたふしがあった。しかし、だれもそれを口に出したり、ましてや実行を試みようとする者はいなかったから、オンドリは翌朝から元気いっぱいときの声をあげて、院子ニャンズの中を活発に歩きまわった。

それにしても、何と風采のりっぱなニワトリだったことだろう。今も私は、彼のガラギラした目、金粉をふりまいたような黒い尾、すつくとたてた暗赤色の首と背を思い浮かべることができる。日光に透けたときかは、コロナのように燃えあがっていた。彼は明らかに赤色野鶏の直系であった。

この精悍せいかんなオンドリは、ふしぎにも私にいちばん打ちとけていた。抱いてときかを搔い